

2020年度 KOKÔ塾「まなびの郷」

# 高大地域連携フォーラム 記録集



主催：和歌山大学紀伊半島価値共創基幹 Kii-Plus  
和歌山県立粉河高等学校

# 2020 年度 KOKÔ 塾まなびの郷 高大地域連携フォーラムジョイントフォーラム 記録集

## 目 次

開催にあたって ご挨拶	兄玉 恵美子（和歌山県立粉河高等学校校長）……………	2
ジョイントフォーラムを終えて	村田 和子（和歌山大学紀伊半島価値共創基幹教授）…	3
KOKÔ 塾「まなびの郷」20 周年を迎えるにあたって	山口 裕市（地域代表世話人・元粉河高校校長）……………	4

### 【第一部】

#### 1. KOKÔ 塾「まなびの郷」の取り組み

①盆踊り復活プロジェクト	松原 女依（2019 年度まちづくり WG）……………	5
②0 歳～ 100 歳までのつながり	潮崎 遥・西林 美晴（2019 年度福祉 WG）……………	7
③しゃべり場トレイン	水口 俊太（2019 年度教育 WG）……………	8
④地域からのメッセージ	楠 富晴（NPO 紀州粉河まちづくりの会）……………	10

#### 2. 串本古座高校・CGS 部の取り組み

森 陽翔・植田 航平（CGS 部）……………	11
------------------------	----

KOKÔ 塾 OB からのメッセージ	西岡 健（串本古座高校教諭）……………	15
--------------------	---------------------	----

#### 3. 第一部の発表を受けてのコメント

舩越 勝（和歌山大学教育学部教授）……………	18
------------------------	----

### 【第二部】講演（リモート）

#### ドイツの高校生企業活動「持続可能な生徒企業」

講師：高雄 綾子

（フェリス女学院大学国際交流学部・准教授）……………	19
----------------------------	----

### 【第三部】KOKÔ 塾に寄せて

①KOKÔ 塾に関わってきた人の思いを聞く……………	41
②フォーラムに参加して（粉河高校生の感想、参加者の感想）……………	47

参考資料 第 2 回企画運営委員会……………	53
KOKÔ 塾企画委員会申し合わせ……………	56

令和2年度 KOKO 塾「まなびの郷」ジョイントフォーラム  
開催にあたって（ご挨拶）

粉河高校校長 児玉 恵美子

本日はお忙しい中、KOKO 塾「まなびの郷」ジョイントフォーラムにご出席頂き誠にありがとうございます。

さて、ご存じの方も多いと思いますが、昨年度は、新型コロナウイルスの影響を受け、予定されていたジョイントフォーラムが実施できない事態となりました。串本古座高校との文字通りのジョイント等新たな取組を含めた盛りだくさんの内容で期待の大きかった分、生徒達、関係者の皆様にとっては大変残念な状況でした。

さらに、今年度も、コロナによる臨時休校等、様々な影響が続く中、本校における KOKO 塾の活動は、自粛せざるを得ない状況になりました。

そこで、和歌山大学、地域の方々との連携のもと、今年度の取組としましては、OBを始め、関係者の皆様の御支援・御協力を頂きながら、昨年度予定していた内容をふまえた上で、このコロナ禍における新たな取組としてオンラインによる KOKO 塾「まなびの郷」高大地域連携ジョイントフォーラム開催の運びとなりました。

1年を経、改めて御準備の上、御発表いただきます串本古座高校の関係者の皆様、誠にありがとうございます。

さらに、フェリス女学院大学国際交流学部の高雄綾子准教授にも予定通り大変興味深いドイツの取組を御講演いただけるということになりました。改めまして感謝申し上げます。

今年度は KOKO 塾、そして、粉河高校生は本日の発表という活動になりましたが、KOKO 塾は来年度 20 年目を迎えます。コロナ禍においては、今後も様々な課題があるかと思いますが、これからも関係者の皆様のお力をお借りしながら、更に進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、簡単ではございますが、開会の挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いいたします。

## 高大地域連携「ジョイントフォーラム」を終えて

村田 和子(和歌山大学 KOKÔ 塾代表世話人)

2020 年度末、私たちは、年間の活動成果報告として位置付けている恒例のジョイントフォーラムを、新型コロナウイルスの感染拡大状況を鑑み「中止」した。

そして、今年、このままでは、KOKÔ 塾を後輩たちにバトンタッチしていくことができないという高校生の願いや、その成果を発表させてあげたい（あげたかった）という先生方の願い等々が、今回の高大地域連携ジョイントフォーラムという事業を生み出す原動力となった。また、KOKÔ 塾が 19 年間の活動の継続の中で生み出している特筆すべきものとして KOKÔ 塾育ちのかつての高校生が、高校教員となって串本古座高校に、粉河高校に登場している。今回のフォーラムでは、私としては、この事実に接していただくとともに、その実像に皆さん方を引き合わせたかったのである。

KOKÔ 塾紀南版をめざす串本古座高校の地域活動クラブの高校生、先生方には直接対面することはかなわなかったが、コロナ禍のなかで培われた大学のオンライン授業、ハイブリッド型事業(対面とオンラインを併用)のノウハウを生かして、フォーラムを実現させ、串本古座高校・地域の方々にも参画いただくことができた。粉河地域では、特産センターに特設会場がつくられ、大学教員は粉河高校で、研究室で、自宅から参加した。また、同じく半島に立地する大学の研究者、OB の参加もあり、関心や取り組みは共通性があることもわかった。

講師の高雄綾子氏(フェリス女学院大学准教授)は、ドイツの ESD の背景を踏まえ、理論的・具体的な実践として高校生企業活動の紹介を通して KOKÔ 塾、CGS 部をつなぎ、ドイツと日本の教育の違い、在り方まで個々が思考をめぐらせる好機をつくってくださった。

身近なまちづくり・環境への「こどもの参画」(1992)を示したロジャー・ハートは、子どもは、大人の操りではない、おとながさせたい活動・取り組みではなく、子どもの自主的・創造的活動へのおとなの参画を説いた。KOKÔ 塾が地域社会にもたらしている影響は明らかにされる必要があるが、私は、その教育的意義は、こうした自分の成長が実感できる生徒たちを生みだしていることであり、生徒たちが「やりたいことだけ」を応援するという高校教員の人たちの意識変革をもたらし、教員の力量形成に寄与していることであると認識している。そこでは、教師と生徒という関係を越えた人間相互発達の関係性が生み出され、構築されている。ここに、教育の本質をみる。

一方で、人口減等の社会変動の中で、20 周年を眼前に控えた KOKÔ 塾では、今後の持続可能な在り方について高校からの提案もあり、深く対話の場をつくりだす一年ともなった。

本報告書は、コロナ禍の中で直面した KOKÔ 塾が、何を生み出そうとしたのかに関わって、その記録をまとめたものである。形としては、高大地域連携フォーラムの採録となるが、20 周年という節目の年を前にした KOKÔ 塾の今を伝えるものであり、今後の発展に活かしていこうとするものである。ぜひ、多くの皆さんにも共有いただければ幸いである。

末尾になるが、この一年の今後に向けた対話に尽くしていただいた企画委員各位、本フォーラムの実現にご尽力いただいた関係者・スタッフの皆さんに心より感謝申し上げる。



## KOKÔ 塾「まなびの郷」20周年を迎えるにあたって

地域代表世話人（元粉河高校長）山口 裕市

高校生に「ほんものの学びを」「学びの文化が生きる地域を」という願いからスタートした KOKÔ 塾「まなびの郷」が、もうすぐ 20 周年を迎えます。今回のジョイント・フォーラムは、「高大地域連携ジョイント・フォーラム」と題して開かれ、フェリス女学院大学の高雄綾子先生のご講演、串本古座高校の「地域クラブ」の活動報告があり、加えて、この 1 年間「コロナ禍」のために活動できなかった KOKÔ 塾のために、「粉河の盆踊り」を復活させた 3 年生の活動発表があり、生徒の皆さんには大きな刺激になったことと思います。

高雄先生が紹介してくださった「ドイツの高校生企業活動」は、高校の正規のカリキュラムに位置づけられた活動であり、KOKÔ 塾とは様子が異なりますが、世界に目を向ければ、このように地域と密接につながった教育活動がいかに重視されているかがよく分かります。

串本古座高校の実践は、クラブ活動として行われていますが、地域の課題を掘り下げ、その解決にどのように貢献するかという“ねらい”と進め方がはっきりしている点など、これからの KOKÔ 塾の活動に参考になったことと思います。また、その活動を指導なさった西岡先生は、粉河高校の、それも KOKÔ 塾の卒業生であることは、KOKÔ 塾の活動が他校にまで広がる“良さ”と可能性をもった特別な取り組みであることを感じさせてくれました。

さらに、「粉河の盆踊り」を復活させた 3 年生の発表は、堂々とした立派な発表でしたし、その活動は「地域の伝統文化を復活させる」という大変意義深いものであったと思います。その過程で、粉河商工会はじめ多くの方々から温かい支援をいただけたのは、「地域の文化を大切に守りたい」という熱い思いがあったからでしょう。頑張った皆さんには、誇りをもってこのことを胸にとめ、その誇りを後輩の皆さんに受け継いでいただければと願っています。

ジョイント・フォーラムの終わりに少し触れたことですが、KOKÔ 塾では大学・高校の先生方から助言やヒントをいただき、地域の方々の支援をいただきながら、自分たちでテーマを選び、主体的に計画を立て、学校の枠を超えた活動の中で「学びの楽しさ、面白さ」を味わうことを大切にしてきました。その中で、一つひとつの経験から何を発見し、身につけるかは、あなた次第です。そして、今は何が分かったか、何ができるようになったか説明できなくても、何年か経って、何かの場面で、KOKÔ 塾で経験したことの意味が分かる……そういうものであってもいいのです。でも、活動の中で、何かに気づいたり、感動したり、分かち合えたり、そういう学びが多ければ多いほど、皆さんの高校生活そしてこれからの人生は、きっと彩り豊かなものになるに違いありません。

KOKÔ 塾「まなびの郷」が 20 周年を迎える今、新型コロナウイルスの感染拡大が懸念される中、世界は、「民主主義の危機」と言われ、何が本当か見定めの大変な状況にあります。どうか高校生の皆さんには、KOKÔ 塾の活動を通して生き生きと学び、楽しみながら、そのような困難を乗り越え、誰もが生き生きと学び、生活できる未来の創り手として、その曇りのない眼で世界を見つめてくださることを期待しています。

## 第一部

### 1. KOKO 塾「まなびの郷」 の取り組み

#### ① 「盆踊り復活プロジェクト」 まちづくり WG 松原女依

司会（横出/粉河高校）：まずはまちづくり WG の松原女依さん、よろしくお願いします。

松原：みなさんこんにちは。

卒業したので元ですが、まちづくり WG のリーダーをしていました松原です。お願いします。

昨年するはずだった発表を今からします。まちづくりWGは1年間色々な活動をしてきましたが、その中でも一番大きかった、記憶に残った取り組みである盆踊りについてだけ今日は発表させていただきます。

「盆踊りプロジェクト：粉河とんまか復活」の活動について紹介したいと思います。

盆踊りプロジェクトですが、パワーポイントに示されている経過報告のように活動をしていきました。粉河保育所に挨拶しに行って、園児たちとアラレちゃん音頭や「粉河とんまか」を一緒に練習しました。

盆踊りプロジェクト 取り組み経過

2018年5月25日（土）  
KOKO塾オリエンテーションにおいて、提案。  
委員長を募る（松原女依が立候補し、実行委員長に）。

6月11日（火）粉河保育所に挨拶  
6月12日（水）紀の川市役所に挨拶  
7月 3日（水）盆踊りプロジェクトの打ち合わせ会議  
7月 8日（月）盆踊りプロジェクト 生徒との打ち合わせ  
7月 9日（火）粉河保育園に「アラレちゃん音頭」を中心に練習



中国の中学生が粉河高校へ来校していただいたときに、盆踊りで交流会をおこなったのですが、その時も一緒に「粉河とんま

か」を練習しました。

また地域で「粉河とんまか」の歴史や由来を知っている増田さんや松浦さんが来てくれて、教えてもらいながら中国の方と一緒に踊りを練習しました。次の写真は、直前に、本校の視聴覚教室で盆踊りの練習を行った様子です。



いよいよ盆踊りの当日です。私が実行委員長として挨拶して、今日来てくれている稲垣さんと鈴木さんが司会を務めてくれました。

結構人が多く来てくれていますね。

次の写真は、教育WGのしゃべり場を盆踊りの当日におこなったという様子です。テーマは、「地域を活性化するにはどうしたらいいか」という、ちょっと難しめのものだったんですが、熱く議論しました。

盆踊り当日「教育WGのしゃべり場」



私たちまちづくりWGは手作りピザを作ったりして、試作とか大変だったんですが、みんなおいしいと言って食べてくれたので、とてもうれしかったです。

出し物の一つとして、軽音学部の演奏をしてくれました。何バンドか出演し、結構盛り上がりました。夕方から音楽が流れ出し、「粉河とんまか」とか「アラレちゃん音頭」とか色々な曲の盆踊りをはじめていきました。この写真のように、日が暮れるまでずっと踊り続けました。地域の人と粉河高校生と一緒に踊ってくれました。

結構輪になって遅くまで踊り続けました。

盆踊りが終わって、9月5日に踊りプロジェクトの反省会議をしました。反省会議で出た意見なんですが、例えば、「粉河保育所の園児がもっと来てくれたら良かったのにな」という反省が多くて、保育所訪問とか行っただんですが、当日は園児が来てくれなかったのが、初めての盆踊りだから仕方がないんですが、本当だったらもっとと思ったんで、来年こそはと話しましたが、結局コロナでできなくなってしまってとても残念です。

そして、これが、私がその反省会で書いた文章なんですが、最後の方だけ読ませていただきます。

9月 5日 (木)  
盆踊りプロジェクト 反省会



「この盆踊りプロジェクト」のおかげで、人前に出ることも、面倒くさいと思いがちなことに積極的に参加することも、何の苦にも思わなくなりました。

この企画を進行した私に感謝してくれる人たちもいますが、私はKOKÔ塾に大感謝です。KOKÔ塾のおかげで成長できた私がやり遂げた初めての大きな行事であるので、KOKÔ塾ありきのことです。自分自身で成長を感じられることができるなんて、普通にすごくないですか？

「もし、来年、私の後ろに続いてリーダーをやってくれる人がいるなら、後悔は絶対にしないと声を大にして言いたいです。絶対に自分のためになるし、絶対に人として成長できるので、ぜひ、ぜひぜひ来年もして欲しいです。来年の夏、期待しています。」というように、来年のことを見据えて書いているんですが、人前に出て何かをするとか、ちょっと苦手だったりしたんですが、それが特に緊張もせず、今も何も原稿を持たず、普通にしゃべれるようになったので、本当に自分が成長できたと思っています。

これから私は、教育学部にすすんで、教師になろうと思っているんですけど、KOKÔ塾の活動で学んだこととかを生かしていけたらと、さらにもっと広められたらと思っ

ているので、これからもがんばりたいと思います。それから大切なことを言い忘れたんですが、提灯は「商工会」さんから、やぐらは「地域のNPO」さんから、電気は地域の「大西電気」さんから、焼きそばとかの屋台を出してくれたのは、地域の「力寿司」さんや「創カフェ」さんが出してくれました。

こんな大きなイベントだったんですが、みんな無償で出してくれたので、本当に助かりました。

それだけでも KOKO 塾ってすごいなと思いました。コロナで色々なイベントがなくなりましたが、もったいないので、どうにかして KOKO 塾を続けていって欲しいなと思っています。私の発表は以上です。

## ② 「0 歳～100 歳までのつながり」

福祉 WG 潮崎 遥  
西林美晴

2019・5 ミーティング  
目標決め

**障がい者  
高齢者  
子ども**

司会：ありがとうございました。それでは続いて福祉WGの発表に移りたいと思います。潮崎さん、西林さんよろしく願いします。

潮崎：福祉WGです。よろしく願いします。

5月のミーティング目標決めでは、障が

い者、高齢者、子どもと関わるという目標を立てました。

この目標にしたのは、今までの0歳から100歳までのつながりといっていたのに、高齢者と障がい者の方々との交流はなかなか持てなかったからです。紀の川市役所の方に協力していただいて、取り組めることがわかり、是非やってみようと思ったからです。

### 2019年の活動内容

- ・車いす体験
- ・オープンカフェ
- ・老人施設訪問(雅)
- ・七夕まつり
- ・読みかたり
- ・保育園訪問
- ・老人大学
- ・ハンドインハンド(スイーツ作り)
- ・盆踊りプロジェクト



活動内容を発表します。車いす体験、オープンカフェ、老人施設訪問、七夕祭り、読み語り、保育園訪問、老人大学、ハンドインハンド、盆踊りプロジェクトなどの活動を行いました。まず、はじめて車いす体験という活動を行いました。

車いすを紀の川市役所から借りて、乗り方や押し方、スピード、声かけ、段差などのやり方を教えてもらいました。

紀の川市役所の皆さん、ありがとうございました。老人施設訪問では、「雅」（みやび）さんにお邪魔して、質問やカラオケをしたりしました。

続いて老人大学です。灯籠作りを体験させてもらいました。作った灯籠はオープンカフェで飾りました。続いてハンドインハンドのスイーツ作りです。素敵なスイーツを作ることができました。続いて盆踊りプロジェクトです。

私たち福祉班は、ジュース売りを手伝いました。なかには卒業生が子どもを連れて

きてくれたりしました。続いて、読み語り養成講座です。本の持ち方や読む速さなどの工夫を教えてもらいました。一番大切なのは、ハキハキと大きな声で楽しむこと。いちから教えてくださり、ありがとうございました。続いて七夕祭りです。粉河小学校へ行き、紙芝居の読み聞かせをしました。その後、粉河駅周辺で、七夕の飾り付けを行いました。

次に保育園訪問についてです。園児たちは、食べる量も歩くスピードも、わがままも様々で先生のパワーに感心しました。お昼寝の後に、元気いっぱいになる子どもパワーもすごいな～と思いました。



オープンカフェについてです。私たち福祉WGは、炊き込みご飯とフルーツポンチを作りました。両方とも売り切れて良かったです。炊き込みご飯は、こんな大きな炊飯器で炊きました。とても楽しかったです。とても大変でしたが、色々な人と交流できて楽しかったです。

今年は、コロナが広がったために学べたこともあると思っています。

KOKÔ塾は、たくさんの人との関わりがあったからできることで、もし自分たちだけだとできないので、コロナがあって、あらためて地域の人たちとの関わりがあって、また和歌山大学も協力もしていただいて、改めてその大切さを知ることができま

した。コロナが収まれば、人との出会いや地域との関わりを大切に活動していきたいなと思いました。

司会：ありがとうございました。実は、潮崎さんも西林さんも、長い原稿を用意してくれていたのですが、今日は時間制限があって、カットをお願いしました。しかしすぐに対応してくれて良い発表だったと思います。

### ③ 「しゃべり場トレイン」

教育WG 水口俊太

司会：それでは最後に教育WGの水口さんをお願いします。



水口：こんにちは。今日発表するのは、KOKÔ塾教育WGなのですが、教育WGというのは、「しゃべり場」という事前に生徒に話題を決めて、じっくり話し合うという活動をずっとおこなってきました。そして今年で3回目となる「しゃべり場トレイン」にポイントを絞って話していこうと思います。

「しゃべり場トレイン」とは、JR和歌山の方々と一緒におこなうイベントなんですけど、毎年和歌山大学の生徒さんとKOKÔ塾の教育WGのみんなと一緒にしています。

しかし、今回は他のWGからも協力してもらい、さらに和歌山高校さんも参加してくれて活動しました。テーマは、「和歌山沿線のおすすめを語ろう」でした。和歌

山線は電車を利用する人が少ないので、〇〇駅にはどんなお店があるなどのスポットを紹介するなど、和歌山線のまちおこしについて語り合いました。いつもは、2つのテーマを決めて話すんですが、今回はじっくり話を深めたいということで一つのテーマに絞って話し合いました。和歌山高校の生徒さんたちも参加してくれて、まちづくりWGと福祉WGの本校の生徒たちも参加しました。

そしてこの企画は2回目になるんですが、「よしもと」のワンダーランドさんという和歌山住みます芸人の方も参加していただいて、一緒に司会をしました。

紀の川市役所からも何人か来ていただいて話をしました。急遽、智弁小学校の子どもたちも参加していただいて、僕たちでは知らないスポット、「ここにはこういうものがあるよ」と全然違う視点から色々なことを教えてもらいました。

そして最後の写真がしゃべり場トレインで出た意見になります。高校生から出た意見は、かなり食べ物の話が多かったです。高校生は風景や公園よりもお腹がすいて、ご飯を食べたいという気持ちが勝ってこういう意見が多くなったんですけど、小学生の意見は、根来寺とか、僕たちも知っているんですが出てこなかった意見を言ってくれました。華岡青洲は皆さん知っていると思うんですけど、その近くにある劇をすところとか、ぜんぜん私たちが知らないところを小学生が教えてくれて、そういうところがあるんだと気づかせてくれました。

教育WGの活動を通して、今まではしゃべり場を教育WGだけでやってきたんですけど、人は十人十色で色々な考え方の人がいるというんですけど、同じ環境で育っていくと、どうしても考え方が似てしまって、話題もあまり広がらなかったりするんです

けど、今回は色んな人が参加してくれたので、自分では到底考えられないような内容が出てきて、それが自分の中で大きな力になったと思います。

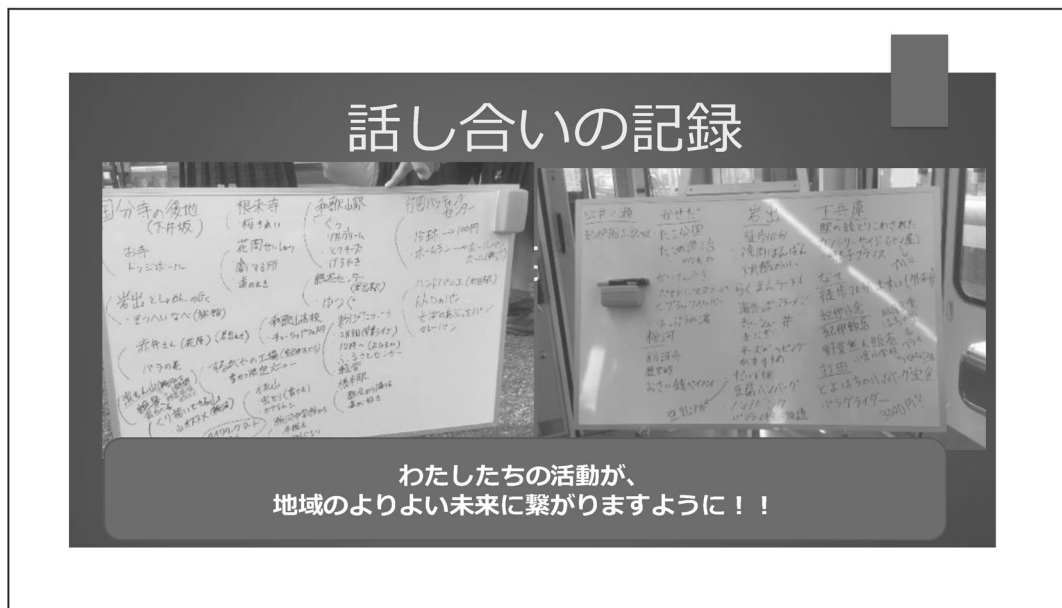
僕たちは教育というまとまりなんで、これは私が教育者になったときに、先生になったときに、一つの意見ではなく、みんなの意見を聞いて、それをまとめるのが先生と僕はそう思っているんで、教育WGではこういうことを学べたと思っています。

僕も大学生になっても、同じような活動をする大学に行くので、この経験を踏まえて、立派な教育者になれたらと思います。後輩へのアドバイスですが、まじめにやっても面白くないので、ちょっとユーモアがあふれるようなね、そういう活動にしてくれたらと思います。以上です。

司会：どうもありがとうございました。みなさんどうでしたか？ 4人の生徒に発表してもらったんですけど、私としたら1年生から知っているので、最初の頃の発表は、原稿を用意して、その原稿を読むだけでもドキドキしながらだったんです。今回の発表はみんな原稿外して、こんなに堂々と発表できるようになったということがね、この成長が KOKÔ 塾の素晴らしさかなと思います。

松原さんは自分では言いませんでしたが、3年生の後半にはビブリオバトルで県大会優勝し、コロナで叶いませんでしたが、全国大会への出場権を得たりと、すばらしい活躍でした。また松原さんも水口さんも教員を志すという話で、私たち教員にとってはとてもうれしい話でした。本当にありがとうございました。もう一度拍手をお願いします。

司会：ありがとうございました。これで粉河高校の発表は以上です。



#### ④ 地域からのメッセージ

##### とんまか通り商店街で、御商売を営む楠富晴さんからのメッセージ

皆さん、こんにちは。さて今期も早いもので3月に入り、締めジョイントフォーラムを迎える日となりました。

昨年までだれもが予想だにできなかった新型コロナウイルスが世界中に蔓延し、未だ出口がはっきりせず 私たち KOKO 塾の活動においても大きな障害となり、活動も自粛せざるをえない状況下にあります。

コロナ禍の中、ややもするとチームの一人ひとりの距離が離れる事が懸念されるところで、生徒さん達は、モチベーションをたもちながら、繋がりを大切に、創意工夫されながら取り組んでこられたのだと今日の発表を聞かせていただき、大変嬉しく思いました。また、生徒さん達のプレゼンの上手さに改めて KOKO 塾の大きな成果であり、そして生徒さんの大きな財産になった事と思います。

今回のようにリモートを活用し地元に住ながらにして広域に繋がりをもてる事にも感動しました。今日の繋がりを今日で終わらせるのではなく発展的にこれからも持続して行く事を楽しみにしています。

最後になりましたが、準備をいただいた村田先生はじめ高校の先生方に感謝を申し上げます。有難うございました。

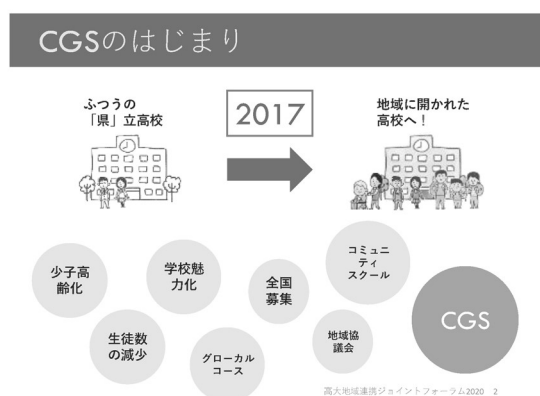
(楠さんは、フォーラム当日は、粉河特産センターに設けられたサテライト会場で地域や自治体関係者の方々とともにオンラインで参加されました)



## 2. 串本古座高校 CGS 部の取り組み

和歌山県立串本古座高等学校の CGS 部の発表を始めます。2 年の森陽翔と、植田航平です。よろしくお願いします。

CGS とは Community General Support（コミュニティ・ジェネラル・サポート）の略で、「地域包括的支援」という意味です。



まず、最初に CGS 部の始まりについて説明します。僕たちの串本古座高校は本州最南端にある高校で、普通の県立高校でした。しかし、2017 年、地域へ開かれた高校へと進化しました。

僕たちの住んでいる串本町は少子高齢化が進行し、僕たちが通う串本古座高校は生徒数が減少しています。それに加えて、多くの中学生が中学校を卒業すると、町外や県外に行ってしまいます。

実際、僕の友人の約半分が町外の高校へと進学していきました。そのため、現在の串本古座高校の生徒数は、1 年 2 年生を合わせてなんと約

150 人ほどです。このままでは生徒数の減少で串本町に学校がなくなってしまうかもしれません。

このような状況の中で、学校を魅力化する必要があり、地域との結びつきを強めるために「グローバルコース」を設置しました。

グローバルコースには特徴的な授業があり、スキューバダイビングの資格が取れる「マリンスポーツ」や二学期間の金曜の午後にインターンシップを行う「串本デュアル」、地元のお寿司屋さんが魚のさばき方を教えてくれたり、近大の先生などから直接指導を受けたり、他には実際に磯釣りが楽しめる「水産生物」という授業があります。

また、他の地域や県外から生徒を募集しています。今も多くの全国募集生串本古座高校で一緒に学んでいます。

さらに、県立学校ですが串本町と古座川町からお金をもらい地域協議会を設立し、和歌山県内では唯一の校内塾である「くろしお塾」を放課後に無料で、午後 8 時頃まで開放して勉強に取り組む私たちを応援してくれています。

そして、地域と協力し地域に開かれたコミュニティスクールとしての活動の一貫として、僕たち CGS 部が誕生しました。

CGS 部の活動目的は、地域の活性化に貢献し地域の未来を考えるグローバルな視点を持ったローカルリーダーを育成することです。

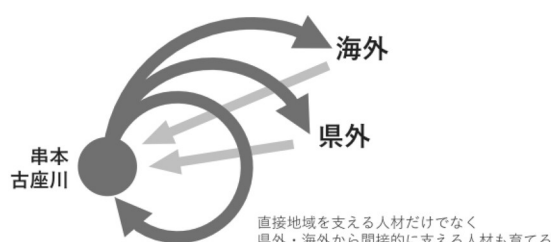
そのために活動していることは、文化祭でバザーを出展したり、地域ボランティアとして色々お手伝いし

たり、生物の研究をしたり、学校避難路の整備をしています。

詳しいことは後ほど説明しますがCGS部の目指すものは、地域を知り、地域に還ることです。

## CGSのめざすもの

### 地域を知り地域に還る



高大地域連携ジョイントフォーラム2020

3

CGSで体験したことを活かして直接地域を支える人材になるだけではなく、県外・海外から間接的に地域を支える人材を育てることを目指しています。

CGS部の取り組みは3つあります。

1つめは、地域を知ろうということです。地域に育っていても、意外と知らないことはたくさんありました。例えば、この地域には天然記念物に指定されている「オカヤドカリ」が生息していることです。このことは私がCGS部に入部するまで知りませんでした。

2つめは、地域と知り合うということです。ありそうでなかった地域の大人との交流です。皆さんはロケット発射場が串本に完成することを知っていましたか？

来年度発射されるロケットを活用してイベントを企画して、観光協会の方たちにプレゼンなどをおこなっ

たことや、地元の方に向けたイベントを企画したりしたことが新鮮であり、地域の大人の方と話をすることは勇気がいるけど楽しい活動です。

そして、3つめは地域を伝えようということです。CGSのそれぞれの班が得意なことで地域の魅力を拡散して、伝えようとしています。

CGS部には4つの班があります。ジオパーク班、プロモーション班、鉄道班、調理班です。それぞれの班が、地域のためにそれぞれ活動しています。



プロモーション班では、ローカルウィキという情報サイトに上げるために地域のお店に取材にいきました。

今後はいろいろな人に串本町を知ってもらいCGSを認知してもらうために、比較的ユーザーの年齢層の若いインスタグラムなども使って広報をしようかなと思っています。

調理班では実際に僕たちで地元の特産品栽培・収穫し、商品開発を行っています。

## 地域を知ろう

Local Wikiの構築



特産品の栽培



地域特有の生物の研究

高大地域連携ジョイントフォーラム2020 CGS

6

今後は実際に販売できるよう挑戦しています。昨年は古座川町の特産品黒にんにく、4年前には串本町の特産品の南端蜜姫というさつまいもを栽培しました。

ジオパーク班では、近くの浜で生息している天然記念物オカヤドカリを育て研究をしています。

普段は本州最南端の串本町よりも南の温暖な地域で生息しているオカヤドカリの越冬のタイミングや条件を調査することで、環境の変化や地球温暖化について、そして気候変動や環境の変化が紀南地方に生息しているオカヤドカリへどのように影響しているかなどを調べてきました。

また、昨年度は地域と知り合うことを目的に、僕たち CGS 部が独自に企画し、観光協会とコラボし、串本町の道の駅で CGS フェスタを開催しました。

CGS 部の3年目であり、1つの区切りとして、また地域の方に認知してもらうことを目的に開催しました。

CGS 部として、地域の方々と協力し、観光客に串本を知ってもらうジ

オパークガイドや、串本町との結びつきの強いトルコの伝統的なパンのシミットや飲み物のチャイを販売しました。

ところで皆さんは、古座川町での全国的に有名な特産品を知っていますか？実はゆずなんです。古座川町の平井地区にある活気のあふれた方々（多くはお年寄り）が栽培している古座川ゆずの里の会社取材に行き、実際に仕事体験をさせていただきました。

こんな田舎でも様々な商品を販売している姿を見て、刺激をうけ、僕たちも負けてられないなと感じました。

他にも地域のこども園や保育園にボランティアに行き、地元の子供達と交流をしています。

## 地域と知り会おう

地域の取材



地域イベントへの参加



ボランティア活動

高大地域連携ジョイントフォーラム2020 CGS

7

地域を伝えようという活動では、プロモーション班で観光甲子園に地元の動画を制作し、それを用いて応募しました。ドローンを使い上空からの撮影も行いました。

## 地域を伝えよう

インターネットでの発信



研究発表



イベントへの参加

高大地域連携ジョイントフォーラム2020 CGS

8

調理班では地元の食材を使って料理を作成しイベントなどで販売を行い、様々なレシピを開発し食材の新たな可能性を見出しています、今はジオパーク班と連携しフナムシの商用化を目指しています。

最近までは、オカヤドカリを県から許可をとり生態の研究を行い大阪で発表し賞を受賞しました。

最後に CGS 部の課題とこれからについて説明します。

私自身、創設の3年目から入りました。その年は、CGS フェスタを実施したり、文化祭でバザーを出店したり活動も充実していましたが、4年目の今年は、コロナウイルス感染症のため、あまり活動が出来ませんでした。

しかし、調理班では地元の食材を使ってトルティーヤを作って、フォトコンテストに応募等をしたり、出来る範囲で活動を継続させてきました。

CGS 部の活動を振り返ると、これまでは模索の4年間だったと言えます。いままではいろいろな分野に手を出してきましたが、すべての班が一体となって活動することが必要だと思いました。

個人の考えですが、ジオ班でフナ

ムシを飼育し、調理班でそれを使った料理を研究・開発・そして商品化し、プロモーション班でPR活動を行ったら面白いのではないかと考えています。

2つ目は、地域のニーズにあった活動です。CGS 部では、いままで高校生のやりたいことを優先しており、あまり、地域のニーズを考えられていませんでした。そこで、これからは、地域のニーズを深掘りして、双方の意見を尊重して地域のお店などと協力して活動していきたいと思いました。

例えばロケットのイベントの時、商店街のお店の方々と、商品開発を行い、その商品を販売してみようと考えています。

3つ目は、高校生の自主性です。これまでは先生の意見を聞いてみてやってみようと考えていましたが、これからは、自分たちが発案し行動していくことが大事であると考えます。これからは自分たちで考え、先生に発案し、行動に移していきたいと考えています。これで CGS 部の発表を終わります。ありがとうございました。

## CGSの課題とこれから

### □ 模索の4年間

4年間、様々な活動に手を出してきたが、そろそろ軸が必要？

### □ ニーズに合った活動

高校生の「やりたい」と地域の「やりたい」の一致

### □ 高校生の自主性

高校生が主役となってやりたいことを実現するのが理想

高大地域連携ジョイントフォーラム2020 CGS

9

## KOKÔ 塾の経験を生かす KOKÔ 塾 OB からのメッセージ

西岡 健（串本古座高校・教諭）

初めまして、串本古座高校で教員をしています西岡といいます。僕は今 26 歳でちょうど 8 年前に粉河高校を卒業しました。僕も当時は KOKÔ 塾の一人として、情報ワーキンググループ(以降、WG)で活動をしていました。

今日は高校卒業から、特にすごいことをやってきたということではないのですが、振り返りつつ、お話ししたいと思います。

僕は、高校時代は情報 WG に所属していました。今日はその発表がなかったのですが、少し寂しいという気持ちもあります。どういう活動をしていたのかということで、懐かしいのですが、2012 年、加藤先生が書いてくださっていた KOKÔ 塾通信を振り返ってみます。(写真右が、高校生の西岡さん)



リーダーの西岡くんによる指導の様子。テキパキと後輩たちに指示していました。クラスに一人は必要な人材です。

「KOKÔ 塾通信 No. 5」2012 年

これは今も行っていると思います。

私が所属していた情報 WG では、いい意味で適当にやらせてもらえたグループだったと思います。どういうことをしてたのかというと、大学に行って豊田充崇先生にお世話になりながら、動画編集の技術などを教えていただきました。



ここに僕が高校三年生の時の写真が載っていますが、リーダーとして後輩に指示をテキパキと指示をしているなどと褒めていただいていたりで、ありがたいと思っています。

今年度はコロナウイルス感染症のためにオープンカフェも出来ていないと思いますが、オープンカフェで情報 WG はなぜか毎度、綿あめを作ることになっていました(笑)。ただ、地域の方とふれあう大事な場ということで、必ず参加させてもらっていました。

私自身、当時の KOKÔ 塾に参加させてもらった理由は、自分からではなく誘われたからです。しかし、もともと人前で発表し

たりするのが好きな方だったので、そのような活動が出来たり、ITにも興味があり、しかも部活動ではないということで自由に活動出来るというのが、当時の僕にとってでは魅力に感じ、その後は積極的に参加したのだと思います。

今の高校生にはイメージできないかもしれませんが、当時はスマホもなかったですし YOUTUBER もいなかったのも、そういうところを僕たちはやろうとしており、僕たちは最新のことをしていたのかなあと、思います。でも結果で何かあらわすということはありませんでしたが、好きなことが出来たと思っています。

そのなかで、KOKÔ 塾では地域と関わることがやっぱり多かったと思います。私自身は「地域を盛り上げていったらいいな」という感じの気持ちで活動していたというより、今振り返ってみると、「自分の好きなことが出来て、それが結果的に地域を応援することにつながっていったら非常にいいのではないか」という気持ちで取り組んでいたと思います。

そういうことをやりながら、粉河高校での KOKÔ 塾を取り組みました

その後大学生になり、私は東京の私立の教育学部に進みました。

私がなぜ教育学部に行ったのか、教員になろうと思ったのかというと、当時僕の地理の担当してくださった先生の授業が一番面白かった楽しかったという気持ちがずっとあり、その気持ちが僕を教員に向かわせてくれたと思います。

今、教員として授業をしていて、そんなに簡単にうまくいかないのも、余計にその先生のすごさを感じています。

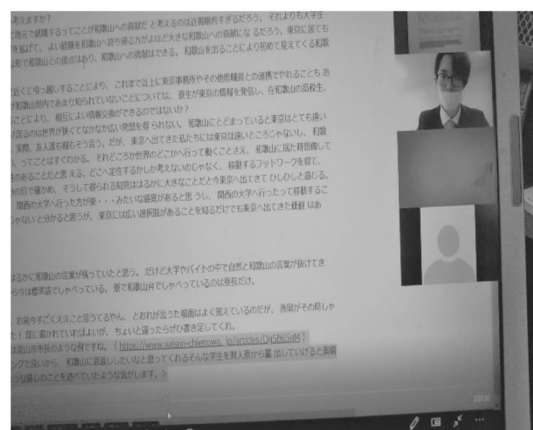
そして、大学にいて、地元を応援するとか、地域を応援するという活動をしてたのかというと、全然していませんでした。ですから先ほどの高校生の発表で、教育学

部に行ってこういうことをしてみたいとか、教育者の視点で地域を応援したいということを知って、すごいポジティブで、そのような子どもたちを育てていて KOKÔ 塾のすごさを改めて感じますし、僕の高校時代とは全然違うことを、発表してくれた高校生を本当に尊敬します。

大学生の頃は、春休みや夏休みなどに、僕は自転車に荷物を乗せて九州一周とか北海道一周とかに行っていました。そのときに、KOKÔ 塾で活動して良かったと感じたことがありました。それは、旅先で大人の人に僕自身から声をかけて交流することが出来るようになっていたことでした。それは、KOKÔ 塾の時に地元の人という、学校関係者以外の大人の方とふれあったり、話し合ってきたという経験が生かされていると今考えてみると思いますし、その話しかけるという経験が僕にとって、苦ではなくなったというのが KOKÔ 塾で得たことであると思います。

ただ、和歌山のことを全く考えてなかったということではありません。

僕自身は和歌山から東京に行き、調布市にある和歌山県人寮に住んでいました。そこには、紀北・紀中・紀南といういろんな地方から東京の大学に進学してくる学生がいて、その中で寮長さんも混じって、和歌山への貢献についてどう考えるかについて話し合いをしたことがありました。



そこで、大学を卒業してすぐ地元に戻って就職することだけが和歌山への貢献と考えるのは近い将来（未来）しか見ていないのではという話にもなりました。

和歌山にいらなくても、和歌山に貢献できるのではないかという話しあいになったことは今でも覚えています。

私は、和歌山にすることだけでは世界が狭いと思っています。東京は一見遠いように思えますが、実際いってみると近くにあると感じられます。

和歌山の、例えば串本から粉河に移動する時は時間的に考えれば、東京に行く方が飛行機で1時間ですので近いとも言えます。それどころか世界のどこかへ行って働くことさえ、和歌山に居た時想像していたよりもずっと可能性のあることだと思えるんです。

どこへ定住するかしか考えないのじゃなく、移動するフットワークを得て、移動することにより自分の目で確かめ、そうして得られる知見ははるかに大きなことだと東京へ出たことでひしひしと感じました。

この中で、関西の大学に進学しようと考えている人もいますが、やっぱり日本の中心である東京に行くことで自分の選択肢が広がり、経験値が高まるという思いもあります。

そして、先ほどの県人寮での話し合いに戻るのですが、「人生のどこかのタイミングでいいので、和歌山に恩返しできたらいいのではないかな？そういう人を県人寮で育てていきたい、輩出していきたい」という思い、そういう貢献もあるということを話し合いました。

KOKÔ 塾でも同じような思いがありながら活動されていると思いますし、KOKÔ 塾で学びながら地元で貢献するという経験ができたからこそ、東京に行ったり県外に

行って学んでいく中でも、和歌山にも恩返しするという考えになれるのかなと思います。

このような考えで、私は今、串本に来て4年目になります。KOKÔ 塾と似ているような地域を応援する CGS 部の顧問をさせてもらってます。

今はまだ、KOKÔ 塾を見習って、まねしながら進んでいっているところが大きいのですが、いずれは KOKÔ 塾を追い越していけるような力のある部活にしていきたいと思っています。

この先も KOKÔ 塾と CGS 部が交流できるような機会が増やせていければ嬉しいと思っています。これからどうかよろしくお願いします。

所属は、2021 年 3 月末現在

## Community General Support

Kushimoto-koza, WAKAYAMA

県大和県連携ジョイントフォーラム  
2020





### 3. 第一部の発表を受けてのコメント

船越 勝（和歌山大学教育学部・教授）

時間がありませんので、3 点に絞ってお話ししたいと思います。

子どもの育ちには2つの教育機能がかかわっていると言われていました。

一つ目は、意図的な営みとしての「教育」(education)、もうひとつは、非意図的に行われるもの、これは「形成」(forming) といいます。具体的には地域や社会で子どもを育てるような側面をいうのです。

今、地域の教育力ってずっと失われつつあると言われていていますよね。そういうふうに見てみると KOKÔ 塾でやっていることというのは、こうした「形成」につながっていくような地域の教育力、例えば、盆踊りを復活させるといったことですが、それは「形成」の力を回復させていたり、「形成」の力を取り戻していたりする営みであると思います。だから、最初に松原さんが「やっているうちに知らず知らずのうちに私は成長していました」と言っていましたね。これは「形成」の力を KOKÔ 塾が取り戻しながら、またその「形成」の力で無意識のうちに育てられたといえると思うのです。

二つ目は、地域と学校の関係です。高校が元々無条件にあって、そのまわりに地域があるということではなくて、地域があって高校がある。例えば、東日本大震災の経験に学べば、地域の復興がなされないと学校再建はあり得ない。地域があってはじめて学校がある。だから、粉河の地域でも、「とんまか通り」の商店街がしんどくなって、どうにかしたいということが地域側のニーズとしてあったとしたら、粉河高校もそうした地域の課題に主体的にかかわって初めて高校として存立し得るんじゃないかなと思うのです。粉河高校もそうだと思うし、串本古座高校も生徒総数が 150 人ということですから、そうです。このような地域が元気になって、人と人がつながり、そのなかで人が育っていくような教育、これが地域発展学習と言われたり、サービス・ラーニングと言われたりしますが、そういうことをやりながら、地域も学校も元気になれる営みやすじみちを考えてきたというのが KOKÔ 塾じゃないかと思います。

三つ目には、新しいものをつくり出すのは、これはよく言われますけれども、「若者・ばか者・よそ者」と言われます。KOKÔ 塾の中心は高校生じゃないですか。ですから、若者が関わっているんだと思うんですね。それから「ばか者」。教育 WG の報告のなかで、「真面目にやっていたら、おもしろくない」って言っていましたよね。言葉を変えていえば、「常識」にとらわれない、「正しい」とされるものに逆らってやっているんだと言ってくださったんだと思います。だから、KOKÔ 塾は、「常識」にとらわれない「ばか者」がつくり出してきた。

そして、私たち和歌山大学のスタッフは、まさに「よそ者」です。

だから、「若者」、「ばか者」、「よそ者」のコラボレーションで生み出してきたのが、KOKÔ 塾なんです。